

キリスト教史学会学術奨励賞受賞『讃美歌・聖歌と日本の近代』を読む —唱歌とキリスト教宣教との関係についての研究史の紹介のために—

A Study of "Hymns and Modern Japan" — An Introduction to the History of Research on the Relationship between "Shoka" and Mission Work in Japan —

安 田 寛*
Hiroschi YASUDA*

論文要旨

手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社、1999）の第3章「音楽と宣教—日本の讃美歌・唱歌の源流を辿って」を節毎に内容を要約し、著者と先行研究者の業績を峻別し、唱歌とキリスト教宣教との関係についての1991年から2000年に至るまでの研究史の概要を知る一助を提供する。

キーワード：手代木俊一、讃美歌、唱歌、キリスト教宣教、キリスト教史学会

はじめに

手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社、1999）は、日本英学史学会（2000）の書評で、故中村理平『キリスト教と日本の洋楽』（大空社、1996）と並んで、「この研究分野で双璧と為す」とされ、キリスト教史学会第51回大会（2000年9月16日、上智大学図書館）では、手代木氏（以下、著者とする）に授与された学術奨励賞の対象業績の一つとなるなど、きわめて高く評価された書である。

その構成を述べると、あとがき以下（あとがき377－385頁、初出一覧386－388頁、譜例389－410頁、著者訳者名索引411－417頁、日本の讃美歌・聖歌目録（プロテスタント教会系）418－489頁、年表・日本の主要讃美歌・聖歌凡例490頁）を別にすると、本書は、前半の論文集（252頁まで）と後半の資料集（376頁まで）の2部から構成され、論文集は「まえがき」以下、序章「讃美歌と日本の文化」、第1章「讃美歌（集）について」、第2章「異文化交流の現場としての讃美歌」、第3章「音楽と宣教—日本の讃美歌・唱歌の源流を辿って」から構成されている。

「序章」（12－38頁）は、1991年12月9日と10日に国立音楽大学教育センターで行われた特

別教育期間講座での著者の発表（松下1993）の再録である。この発表で「数々の問題提起を行った」（p.12）とあるが、その多くは私が提起した問題と同じものであることは、同じ書（松下1993）に掲載された私の発表「キリスト教宣教師が日本の唱歌成立に果たした役割—その歴史的検証」と合わせて著者の「序章」を読めば明らかであろう。発表会の総論として他の発表者の研究の紹介であった著者の発表を他の発表から切り離して単独で採録した著者の意図がどこにあるのかあえて詮索はしないが、序章は注もなく、学術論文ではないので、ここでは取り上げない。

「第1章」（39－82頁）は私には専門外なので評価はできない。

「Ⅰ 異文化交流の現場としての讃美歌」「Ⅱ 《真白き富士の根》と讃美歌」「Ⅲ 日本における音楽」からなる「第2章」（83－134頁）については、「Ⅲ 日本における音楽」は後半の資料集に含めるべきであろうと指摘するに止める。

なお、著者は触れてないが、この史料は、1879年11月20日付けの目賀田種太郎宛メーソン書簡に「ボストン・ヘラルド紙の付録を沢山お送りします。日本へ行くことについて私にインタビューした記事があります」（東京芸術大学附属図書館

*弘前大学教育学部音楽科教室
Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

1971, p.17) に私が注目して、当時ボストンに滞在中であった著者に入手・送付を依頼した経緯は、松下(1993, p.100 - 1)にあること、この史料で唱歌教育史にとって重要と思われる箇所はすでに拙稿(1994, p.15 - 6)が原文で紹介したことに注意をうながしておきたい。

以上を踏まえ、先に紹介した書評で、「研究論文中のハイライトであろう」と評価され、秋岡陽(2000)が「最も読み応えのある章だ」とした第3章を読んでゆく。

1「音楽による宣教」(p.136 - 8)

「音楽による宣教」という、漠然としたキーワードによって唱歌とキリスト教宣教との関係について、とくに越川美津子、中村理平、赤井励、私の研究からの大量の引用と、翻訳した英文資料にほとんどの紙面を割いている第3章の主題について、後節では「キリスト教と音楽、すなわち〈音楽〉と〈宣教〉の結びつきを論じたいがために、本章のタイトルを『ミュージック・アンド・ミッションズ=音楽と宣教』とした」(p.177)と述べているが、この節では、トゥルジェー、オルチン、メーソンの「3人を通して〈音楽と宣教〉の問題を扱い、日本の唱歌・讃美歌の源流を日本ではあまり知られていないアメリカ側の資料を紹介しながらたどってみたい」と本章の目的を述べている(p.136)。ただ不思議なことに日本の讃美歌の源流についてはどこにも述べられていないから、第3章は実際は日本の唱歌の源流を述べたものである。

また、トゥルジェーとメーソンを中心に〈音楽と宣教〉の問題を扱い、簡単な解題を付して日本の唱歌の源流に関する日本ではあまり知られていないアメリカ側の資料を紹介した拙稿(1994)と同じ視点と方法によって、そこから大量に引用している第3章は拙稿との微妙な関係を最初にはっきりと説明する必要がある。

「〈音楽による宣教〉とは、日本にルーサー・ホワイティング・メーソンを派遣したエーベン・トゥルジェーが海外伝道を考える際、常に念頭にあった言葉である」という書き出しについて、著者が言及しない研究史に触れると、唱歌教育史の定説に反して、メーソンを日本に派遣したのはトゥルジェーであることを明確にしたのは中村理平(1993, p.483 - 4)であり、その背景に音楽の普及を通じて日本でのキリスト教宣教に貢献すると

いうトゥルジェーの思想があったことを明らかにしたのは拙稿(1994, p.18, 1996, p.2)と中村(1996, p.596)であった。これらの研究史に触れずに冒頭の一文は書けない。

その後メーソンとオルチンの既知の経歴を述べ(p.136 - 8)、これまで「唱歌(音楽教育)史、讃美歌史という別々な分野で論じられていた人物であった」(p.136)と言うには、これが拙稿(1995)以前のはなしであることを注記する必要がある。

上記二人は、組合派というおなじ教派に所属していたから、「2人の近しい関係が想定される」とし、その証拠に「実際、オルチン師を宣教師として派遣したボストン・アメリカン・ボード本部へのオルチン師の書簡には、メーソンの再来日の必要性が尊敬の念と近親感をもって述べられている」(p.138)と言うのであれば、拙稿(1995, p.115 - 6)を引用したことをきちんと注記しなければならない。メーソンの所属教派が組合派であったことは、拙著(1993b, p.315)が明らかにし、拙稿(1995, p.107)でも述べた。

他にもこの節で散見される参考文献の不指示についていうと、まず、メーソンの経歴と業績に関して、「日本での功績からこの年、勲四等瑞宝章を授与されたがアメリカに送られた時には死去していた」(p.137 - 8)というのは、メーソンの経歴に関する中村(1993, p.546, 550)の重要な業績の引用であり、メーソン編讃美歌集について述べた箇所(p.137)とその注81も、中村(1993, p.435 - 6)とHowe, S. W. (1988, p.30, 237)の引用である。オルチンの業績に関して著者があげた、「日本で初めての本格的オルガン教本である『風琴教授詳説』(明治二四年)の執筆」(p.137)は、赤井励(1992, p.3, 1995, p.119)の引用である。

研究の視点と方法を含めても、冒頭の節で著者の貢献と認められるものは、(1)「蓋を閉めれば事務机に変わるオルガンデスクも考案」(p.137)したことがメーソンの業績の一つであったという指摘の他には何もない。第3章は著者の業績と他人の業績とを峻別した書き方ではないので、後節でも著者の業績には通し番号をつけて明示する。

2「オルチン師の〈音楽による宣教〉の現場とオルチン師から見た日本の音楽」(p.138 - 142)

この節はオルチンが日本から出した1882年11月14日付第1信(p.138 - 140)と1883年11月2日付第2信(p.140 - 2)にある日本の教会音楽

に関する箇所を紹介する目的で書かれてある。

第1信は若山(1999)がほぼ同じ箇所を取り上げ(p.155),第2信も若山は「オルチン師による日本の讃美歌考のいわば序章とも言うべきもの」として楽譜入りで紹介した(p.117-8)。

オルチン第1信に関連して著者は、カーチス編集の讃美歌集について既知の事実を述べ、拙著(1993b, p.274-9)が述べたタルカット書簡に言及し、カーチスとメーソンとの交際、『讃美歌并楽譜』が『小学唱歌集初編』に与えた影響、同唱歌集中の16曲が讃美歌と同一曲であることを述べる(p.139-40)。

カーチスとメーソンとの交際について著者は「同じ教派ゆえに友好を深めたことだけは確かである」(p.140)と言うには、「メーソンは組合派の信者であった関係で、おそらく組合派の宣教師と交際があり、特にカーチスとは、新しい曲集の編集について親しく交際した仲であつたらしい」(拙稿1995, p.107)の引用であり、著者が拙論に反論するでもなく、賛成するでもなく曖昧に述べている影響関係について言うには、拙著(1993b, 317)と拙稿(1995, p.107)の引用であることを明らかにしなければならない。

『小学唱歌集初編』中にある讃美歌曲についての私の説は、松下鈞(1993, p.50)で最初に公表し、拙著(1993b, p.14-5, 134-8, 146, 317)で繰り返した通りであるが、著者はこれらのことや著者と私との関係を明らかなるかわりに、新聞記事やテレビの教養番組、娯楽番組を指示している(p.228)。間違って著者の業績とする例もあるが(赤井励1995, p.35),中村(1996)が述べていることが正しい(p.596, 602-5)。かつて著者自身(1991)が、『小学唱歌集』初編～第三編(文部省・一八八一～一八四四=明治十四～十七年)に収録された九一曲の唱歌の内、一一編もの讃美歌が曲として採用されている。山口芸術短期大学安田寛助教授によれば、三〇曲程讃美歌の曲が唱歌になっているという」と述べ、その注で、「山口芸術短期大学安田寛助教授の私信による。安田助教授はこれらのことを近日中に発表する予定とうかがっている」と断っている。ここに「近日中に発表する予定」とあるのが後の『唱歌と十字架』である。

この頃の研究の様子について、中村(1996)が次のように語っているのが参考になる(p.434)。

「フェリスの図書館では手代木さんに暖かく迎

えられ、便宜を図っていただき、研究資料の収集は飛躍的にすすみましたが、僕の研究目的を聞いた手代木さんが『そうした研究をしている人がいて、もうかなり唱歌と讃美歌との関係を発見しています』というのです。日本で最初に文部省唱歌と讃美歌の関連研究を始めたつもりの僕には、まともやショックでした。こうして安田さんが僕の前に出現しました」

この節では(2)メーソンとカーチス宣教師との交際を裏付けた資料であるタルカット書簡の発見(拙著1993b, p.274-9)のみが著者の貢献に数えられる(p.139)。

3「メーソンと伊沢修二、目賀田種太郎」(p.142-150)

この節では、オルチンの第2信にある彼の日本音楽論がメーソンの日本音楽論を再確認したものだという著者独特の見方(p.142-4),メーソンと伊沢修二、目賀田種太郎との出会い(p.144-9),彼らが行った日本語唱歌掛図制作(p.149-150),の3点が述べてある。

オルチンとメーソンの日本音楽論を関係づける根拠は、オルチンがアメリカで報道されたメーソンの記事を読んだであろう、という著者の想像にすぎない(p.143)。オルチンとメーソンに共通する日本音楽論は当時のアメリカの音楽関係者に共通の認識であつたと見るのが自然である。

「日本の音階が五音音階であることの発見者はメーソンだといわれている」(p.143)と言うが、著者が注102であげた典拠史料はすでに中村(1993)が翻訳し、その中に「メーソン氏は日本の音階は、イタリア音域のうち、第4音と第7音を欠いた5つのみの音で構成されていることを発見した」(p.504)とあることを注記しなければならない。

中村は遺著(1996)でも、「メーソンは来日まえから日本の5音音階についての知識を持っていたことは、日本到着時に横浜で発行されている英字新聞の記事であきらかです」(p.598)と述べているから、中村の遺著の編集者の一人として、これを知らなかったと著者は言えない。

また日本人が最初に歌い、最初に日本語に翻訳された讃美歌「There is a happy land」の曲が、『小学唱歌集』の《春のやよひ》と《わが日の本》の曲に採用されている」(p.143)の先行研究が、中村(1996, p.598)と拙稿(1997, p.8)であるこ

とは注記が必要である。

次に、伊沢と目賀田の経歴について既知の概略を述べ (p.144), 唱歌教育導入に関して、「伊沢修二ばかりが評価されるが、目賀田のメーソン来日までに果たした役割は大きい」(p.144) と言うには、目賀田の役割について述べた拙稿 (1997, p.2-3) に触れなければならない。これに関する山住正己と大井悌四郎の先行研究はここでは取りあげない。

続く伊沢が述べたメーソンとの出会いについて (p.144-6) は、中村の研究 (1993, p.479-481) をそっくり引用したものであることを明示する必要がある。

伊沢にメーソンを仲介した三岡丈夫の役割と経歴をはじめて明らかにしたのは中村 (同上) であった (p.481) ことは必ず注記が要る。著者は中村の「後文では伊沢の記憶違いか、あるいは誤植か“三園丈夫”となっているが」という文を勝手に「誤植か伊沢の思い違いか、三岡が三園になっているが」と書き換えた上で、三岡の経歴を簡単に紹介し (p.146), その注に「三岡丈夫の経歴は次の三点による。中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五年[一九九三]年二月), 由利正通編『子爵由利正通傳』(由利正通 昭和一五[一九四〇]年), 『月刊楽譜』九卷一十一号 (大正九[一九二〇]年11月)」と書き (p.229), 著者がそっくり引用した中村の研究が、たんに三岡丈夫の経歴の参考文献の一つであるように装った記述がしてある。

これを三岡の経歴の出典について述べた中村の注「ここに揚げた三岡丈夫の経歴等の出典は、由利正通編『子爵由利正通傳』(由利正通・昭和15年), 『官員録』(国立公文書館所蔵), 『月刊楽譜』(第9巻・第11号・大正9年11月・27頁) その他であるがいずれも詳しい経歴は記載されていない。」(p.498) と比べれば、研究者としての知的誠実さを欠いた著者に疑問を挟まざるをえない。先行研究と注をそっくり引用しながら、先行研究が使用した史料にのみに言及し、先行研究は参考文献の一つであるかのように装った注記は、この後も頻出する。

次は、目賀田とメーソンとの出会いについて、拙著 (1993b) の引用とボストンの出版社ギン社の社史とを使った説明である (p.146-7)。後者は拙稿 (1994, p.13-4) が英文で紹介したものであるが、そこでも触れたように、かつて著者がア

メリカで収集し、私に送付したものだから、あえてプライオリティを主張する気はない。

続く、中村 (1993) が指摘し (p.405), フェリス図書館に寄贈したマコナシー (McConathy, O. 1937) からメーソンと伊沢との出会いに関する部分の訳出 (p.148) は、ほぼ同じ箇所が原文で拙稿 (1994) にある (p.14) ことを、著者は触れる必要がある。

この節の最後の部分は (p.149-50), すでに述べたように、メーソンが目賀田と伊沢の協力を得て、日本語音楽掛図を制作する様子を明らかにした拙稿 (1997) を引用した部分である。

この節では (3) オルチン第2信は「メーソンの日本音楽論を再確認し、そのことを中心に報告した書簡である」という主張 (p.143-4) と (4) ギン社史の紹介 (p.147) 以外, (5) ボストンヘラルド紙の記事 (anonymous1879) にあるメーソンの日本音楽観の指摘 (p.143), (6) 注114でフィラデルフィア万国博覧会の日本からの出品に「音楽書一、音楽に関する二十一巻 (古典及び近世)」があったことの指摘 (p.229-30), の2点のみが著者の貢献である。

4「メーソンにおける〈音楽と宣教〉と一九世紀アメリカ」(p.150-160)

この節は、日本で宣教活動に協力したメーソンについての諸研究の引用、つまりアメリカ側の資料を使った拙著 (1993b) の引用 (p.150-3), メーソンの北海道旅行についての前川 (1992) の引用 (p.153-4) と拙著 (1993b, p.210-7) と拙稿 (1995, p.42) の引用 (p.154-5), 「七一雑報」等を使った越川 (1992, p.48-9) の引用 (p.155-7), 資料「日本における音楽」の紹介 (p.158-9) から成る。

ここでも引用した他人の業績の取り扱い是不注意であり、アダムズ師が書いた記事「インタレスティング・ヒストリー」を訳出した部分 (p.151-2) とほぼ同じ箇所が拙著 (1993b, p.310, 308) にあることに言及しなければならない。著者に依頼してこの史料を私が入手した経過は、拙著 (1993b) で述べた (p.308-9)。

婦人宣教師パームリーがメーソンと交際があった件に関して、拙稿 (1998, p.42,) でも繰り返し述べた。同一の史料を使って同じことを述べる (p.154-5) には、先行研究に言及する必要がある。

著者がいう「音楽と宣教」という視点から牧師植村正久が書き残したものと「七一雑報」の記事にはじめて注目したのは、越川の業績（1992）であることは必ず注記しなければならない。著者はそれをしないで引用するか（p.155, 157）、本人からの「ご教示」として引用している（p.156）。しかし、すでに論文として発表された研究を引用しないで、著者本人からの「ご教示」とするのは、学術論文の書き方に反する。プライオリティが曖昧になる他、著者が参考にした文献に到達する便宜を読者から奪うからである。これは注（参考文献）本来の役割に反するものである。こうした「ご教示」はこの論文で多用される。

この節でメーソンに宣教師になる計画があったと伝える伊沢の一文（p.158）を引用するには、すでに同じ視点で注目した拙稿（1995, p.105）を注記しなければならない。なお、著者も講演者の一人として参加した、音楽図書館協議会主催の1993年の函館セミナーで、私は、この一文にあるメーソンに宣教師になる計画があったことに注目し、それが事実かどうかについて発表した。

著者は他人の研究から再録したこれらの日本側資料にある、「音楽と宣教との結びつきが見過されていた」（p.158）と言うが、1991年以前の研究について言うつもりなら正しい。

最後の（7）「ドワイト音楽ジャーナル8月号」の記事（anonymous 1880c）にはじめて紹介されたもので、メーソンの来日の意図の一つにキリスト教宣教に貢献することがあった、とした私の説を補強する材料になり得ている（p.158－9）。他には、（8）メーソンが明治一四年の暮れから行った関西旅行で、当時梅花女学校で働いていた婦人宣教師コルビーと会ったことを明らかにした（p.154）ことがこの節の著者の業績である。

5「オルチン師のメーソンへの評価」（p.160－3）

この節は、オルチン書簡（1884年1月14日付）を翻訳したものである（p.160－3）。

私は元の手書き書簡を全文浄書し、日本語の概要を添付し、「唱歌とアメリカン・ボード宣教師往復書簡—宣教師L・W・メーソン4教派合同派遣問題の経緯を中心に—」（1994年4月22日、同志社大学人文科学研究所）と題した発表で配布した。このとき著者も聴衆の一人であった。

その後、この発表をもとに書いた拙稿（1995）では、紙数の制限で、オルチン書簡自体は掲載せ

ず、「伝道と音楽との関係、日本の音楽の現状について報告した、洋楽史にとって貴重なドキュメントになっている。メーソンに関しては、簡単に言えば、大阪ステーションは特にメーソンの来日を歓迎する、というものであった」（p.115－6）と簡単なコメントを付すにとどめておいた。著者がこの書簡を翻訳し公開するにあたっては、これらのことを注記する必要がある。

「上記書簡から、メーソンが文部省から解雇され、お雇い外国人としての再来日が不可能になった時点での、アメリカン・ボード宣教師たちのメーソン招聘の熱望をうかがい知ることができる」と言うのは、拙稿（1995）の成果を引用したものであることを明らかにしなければならない。ただ、（9）この書簡の翻訳を公表し、研究者の便宜を図ったことは著者らしい貢献である。

6「盲人への音楽教育」（p.163－170）

この節は、前節のオルチン書簡に関して、メーソンの盲人教育への取り組みとそれへのオルチンの期待とを述べた拙稿（1995, p.116）の引用（p.163－5）、文部省が関心をよせていた盲人教育についての中村（1993, p.464－5）の引用（p.164）、同じくメーソンが作成した盲人のための撫譜についての中村（同上, p.525）の引用（p.165－6）を中心に構成してある。

上記オルチン書簡について拙稿（1995）では「メーソンとの関係でオルチンはもう一つ重要なことを述べている。それは盲人の音楽教育である」（p.116）と書いたが、著者はそれに触れずに「また、この書簡でオルチンがメーソンを高く評価する中に盲人への教育があげられる」（p.163）と節を書き始めている。

盲人楽師に触れたコルビー書簡（Colby, A. M. 1884）の紹介（p.163）の後で、「当時『日本のクリスチャンになったことにより現在では使うには不適切な日本の音楽をやめたので、私たちはそのかわりのものを与えなければなりません』。しかしこれでは盲人は失業してしまう。そこで教会で再教育して、それまで同様自活の道を歩ませる。この盲人への教育にメーソンが最適だとオルチン師は述べている」（p.164）と言うには、「当時、盲人はもっぱら音楽を職業としていた。しかし、彼らがいったんクリスチャンになると、それまでの自分たちの音楽を棄ててしまう。しかし、それでは彼らは家族を養うことができない。そこで、教会

としては、彼らが新しい音楽で家族を養うことができるように教育する必要がある。そのような教育にメーソンが最適だというのがオルチンの意見であった」(拙稿 1995, p.116) を引用したことを言わなければならない。

「文部省も盲人への音楽教育に関心を寄せていた」と述べた中村の研究(1993, p.464-5)を、本文と注を使って、そっくり引用(p.164, 232)したことを著者ははっきり書かなければならない。この部分は正しくは、「(中村(1993)によれば、)文部省も盲人への音楽教育に関心を寄せていた(p.464-5)」とだけ書けばすむはずである。

「ドワイト音楽ジャーナル9月号」(anonymous 1880d)にあるパーキンズ盲学校に関するメーソン書簡を紹介した部分(p.164)は、拙稿(同上)中の英文(p.125)を翻訳して載せたものであることを明示しなければならない。この部分の正しい先行研究はハウ(Howe, S. W. 1988, p.135-6)であるが、私の注が不備だったせいか、著者もこの先行研究に触れていない。

「明治一四年一月三日京都府立盲啞院を訪問」(p.164)についても、注で拙稿(同上, p.116)に触れず、「ご教示」としている。続くメーソンの旅行申請(p.164-5)は、英文を日本語に変えただけで拙稿の注(同上, p.125)をそっくり引用し、メーソンが離日後に伊沢と福岡への書簡で盲人の音楽教育について述べていたという部分(p.165)は、拙稿(同上, p.116)とその注をそっくり引用し、メーソンが作成した盲人用撫譜について述べた部分(p.165-6)は、中村(1993, p.525)をそっくり引用したものであることを明示しなければならない。ここでも参考文献を不明にする注付けがなされている。

続く、(10)「ミュージカル・ヘラルド4月号」(anonymous 1880b)中にあるメーソンが琴を西洋の音階に調弦することを山勢に指導したことを伝える記事の紹介と、モースの日記のよく紹介される箇所とその具体的様子を指摘したのは、著者の努力である(p.166-7)。ただしその後の、山勢、彼と合奏をした高嶺夫人と高嶺秀夫の略歴は既知のことであり(p.167-8)、著者が長々と引用している山勢の「メーソン氏の逸話」(p.168-9)は、中村(1993)が、「メーソンと直接に接触を持った人々が語る貴重な伝聞資料」として掲げているものであり(p.410-1)、遠藤(遠藤宏 1948)も取りあげ、主な内容を紹介したものである(p.147)。

あとこの節で著者の貢献に数えられるのは、(11)盲人の音楽家と琴とについて述べたコルビー書簡(Colby, A. M. 1884)の紹介(p.163)、(12)「ドワイト音楽ジャーナル9月号」(anonymous 1880d)にあるメーソン書簡中の山勢への言及の指摘(p.165)、(13)オルチンが日本の讃美歌についての論考で『箏曲集』の序文に言及していることの指摘(p.169)、(14)公立学校に音楽の授業を導入する目的の一つは教会の歌唱に役立てることである、というトゥルジェーの思想の紹介(p.169)である。

7「讃美歌とオルガン」(p.170-4)

この節はリードオルガンの普及に果たしたメーソンとオルチンの功績を述べるつもりらしいが、オルチンについては、赤井(1992, p.3, 1995, p.119)がすでに指摘している『風琴教授詳説』を著したことを繰り返すのみである(p.174)。

伝道にとってオルガンは必需品であったなどと常識を述べた後(p.170)、文部省の音楽学校よりキリスト者の讃美歌とオルガンの方が勝っていたという植村正久の一文を引用するには(p.170)、越川(1992, p.49)から引用したことを明示しなければならない。また、七一雑報(1881年8月12日)の記事中のオルガンについても(p.173)、「ご教示」としないで、越川論文(同上, p.48)の引用であることを明示しなければならない。

続いて赤井(1995)を長々と引用して、オルガンの視点から唱歌がキリスト教の礼拝音楽から強く影響を受けているという赤井の考えに賛成だと言っている(p.171-2)。

拙著(1993, p.34)から引用した、メーソンが日本の学校にオルガンが必要だと述べたという箇所の注166は誤りで、音楽新報の記事(anonymous 1880a)が正しい出典である。

中村(1993)もメーソンの仕事の一つに「楽器の修理・製作法の教示」(p.525)を掲げているが、中村(1993, p.526)を引用した著者は、それをはっきり示さなければならない(p.173)。著者が強調したいことは、メーソンがオルガンデスクを考案し、日本政府が発注したということらしいが(p.173-4)、著者が掲げた資料以外に、それを裏付ける資料はない。

「メーソンが解任された後、当時在日のアメリカン・ボードの宣教師はメーソンの再来日を希望していた」(p.174)と言うには、拙稿(1995, p.115)

を引用したことを明示する必要がある。

宣教師として再来日を希望していたメーソンに「キャビネットオルガンの熟練工を連れて」来る計画があり、彼の再来日の目的に「リードオルガンを日本に広める」(p.174) ことがあったと指摘するには、先行研究である拙稿(同上, p.118)に言及する必要がある。

キャビネットオルガンについての説明も、先行研究(赤井, 1994, p.10)の指示を欠き、「宣教との結びつきを強く感じさせる」というミッションリーオルガンについても、本人からの「ご教示」としないで、「このようなタイプはミッションリー・オルガンとも呼ばれるのだが、(中略)宣教のためのオルガンという意味合いの強い楽器だと言えよう」(赤井 1994, p.13)の引用であることを明らかにしなければならない(p.174)。

最後のメーソンが、オルチンに音楽を学んだ辻茂治を上海のメーソン・アンド・ハムリン社に紹介した、という指摘は(p.174)、著者独自の研究なのか私には判断できない。他には著者の貢献は(15)メーソンが考案したオルガンデスクを明治政府が発注したとある記事の指摘(p.173)のみである。

8「エーベン・トゥルジェーの果たした役割」(174 - 186)

この節は、「ミュージカルヘラルド6月号」(Colby, A. M.1884)に掲載された婦人宣教師書簡(p.174 - 7)、ミュージカルヘラルド誌(p.177)、日本の唱歌に大きな影響を与えたトゥルジェーの経歴(p.177 - 9)、「ミュージカルヘラルド4月号」(anonymous 1880b)に掲載されたメーソンに関する記事(p.179 - 86)とが紹介されている。これら記事を全文翻訳する著者の努力は認めるが、資料集に含めるべきであろう。

これまで日本で詳しく紹介されてないトゥルジェーの経歴について、参考文献が4点あがっているが、著者が述べた経歴はThe New Grove Dictionary of American Musicの項目「Tourjee, Eben」の大まかな翻訳にすぎない。その末尾でトゥルジェーの「キリスト教伝道の意識が海外に向けられた時、メーソンの日本への派遣が計画され、そして実現した」(p.179)と述べるには、「メーソンの来日の目的には、トゥルジェーの意向が強く反映していると思われる。一語で言えばキリスト教の宣教に貢献する、というものである」(1994, p.18),

「トゥルジェーは、かつて、メーソンの日本派遣を企画し、彼の日本での活動をバックアップした。

(中略)メーソンを日本に派遣したトゥルジェーの目的が、実は布教活動と深く関わっていた」

(1995, p.111 - 3),「唱歌は、正に、メーソンを派遣したトゥルジェーの未完の日本音楽伝道計画の落とし子であった」(同上, p.121)を引用したことを明示しなければならない。

この節では、(16)「ミュージカルヘラルド6月号」の「Music and Missions」欄に掲載された婦人宣教師コルビーがトゥルジェーに宛てた書簡(Colby, A. M. 1884)の紹介(p.174 - 7)と、(17)「ミュージカルヘラルド4月号」(anonymous 1880b)に掲載されたメーソンに関する記事(p.179 - 86)の紹介が著者の貢献である。

9「〈音楽と宣教〉の葛藤、折衷、結実、森有礼、目賀田、伊沢、メーソンとトゥルジェー」(p.186 - 216)

この節は、トゥルジェーがメーソンを派遣した経緯(p.186 - 90)、東京女子師範学校での音楽会の様子を述べた「ミュージカルヘラルド7月号」の記事(anonymous 1881a)の紹介(p.190 - 2)、音楽取調掛設置の経過と当事者の苦労(p.192 - 4)、音楽院に関する「コスモポリタン」の記事(Walker, E. D. 1889)の紹介とキリスト教抜き近代化はありえないとするトゥルジェーの思想(p.194 - 8)、伊沢の書簡に見られる唱歌導入にあたっての葛藤(p.198 - 205)、政府は唱歌教育を愛国心涵養に利用し、讃美歌を積極的に利用したという中村理平の見解の引用(p.205 - 7)、明治時代に西洋音楽が必要だったのは、国民意識の養成と近代的軍隊の創設のためであるという考え方(p.207 - 8)、先の音楽会のプログラムが掲載されている「ミュージカルヘラルド8月号」(anonymous 1881b)の記事の紹介(p.208)、19世紀アメリカのクリスチャン・ホームの概念がトゥルジェーの音楽院にも見られ、音楽院に留学した幸田が信仰を深めたこと(p.208 - 15)、結語(p.215 - 6)から成る。

著者の論述から離れてメーソンを日本へ派遣したトゥルジェーについての研究史を整理すると、ニュー・オーリンズ綿百年期博覧会の期間中、地元紙(The Times - Democrat)の記者がトゥルジェーに行ったインタビューは、1885年3月17日に「学校音楽」という記事に掲載され、それがただ

ちに翻訳され、日本教育会雑誌（第21号、明治18年7月31日）に転載された記事にある下記の箇所が、日本でのトゥルジェー研究の発端となった。

「余かつて日本公使より日本国公立学校に音楽唱歌を開設するために最も適當の人を推薦すべしとの委嘱を受けしとき、ここに最好適なる知己の一人博士エルダブリュー、メーソン氏をもってこれに答たり。該公使欣悦してその言を要れ、ついに我が親友をもってこの道に充てたり」

中村（1993, p.499）が述べたように、この記事に注目してメーソンを日本に派遣したトゥルジェーの功績に最初に言及したのは、野上俊之であった（1980, p.53）。中村（1993）は、野上がメーソンを推薦したトゥルジェーの「重要性に言及していない」と批判し、トゥルジェーの推薦こそがメーソン来日の決定的要因であったと、研究の重要な一步を画した（p.483 - 4）。

記事にある公使に関して、中村（1993）は、博覧会に出席した田中不二麻呂に注目し、「日本公使を通じて音楽教師の斡旋を依頼した人物も、確証は見あたらないまでも田中不二磨以外には考えられない。多分ニューヨークに到着した際にこの件の要請を当時の吉田清成在米特命全権公使に申し出たのではなかろうか」（p.484）とした。

これに対して、私は、トゥルジェー（L. E. Tourjee, c 1960）の記述によって、日本公使は森有礼である可能性が高く、その時期も、1872年8月であるとする説を、1991年12月10日に国立音楽大学教育センターで行われた特別教育期間の講座ではじめて発表した。

すでに拙稿（1993a）でも述べ、中村（1993, p.483, 498 - 9）もはっきり書いている以上の研究が、野上、中村、そして私による日本でのトゥルジェー研究の発端と成果である。

これを補足する研究には、著者が、サミュエル（E. I. Samuel, 1913）のトゥルジェー伝の中にも、トゥルジェーがメーソンの日本行きを手配したという記述があると指摘したこと（松下1993, p.95）、赤井励が、日本教育会雑誌（第21号、明治18年7月31日）に転載された記事と同じものが、白井規矩郎（1897）『風琴修覆及取扱法』同文館、33 - 40頁に「附録 学校唱歌ノ必要 米国新英蘭土音楽院長イーベン、トルジェー氏」として掲載されていることを発見した（拙稿1994, p.10）ことがある。さらに補足する資料にコンドン（Congdon, J. 1907）とコバーン（Coburn, F. W.

1934）があるが、拙稿（1994）が原文で紹介した箇所をほぼそっくり翻訳して再録した（p.189 - 90）ことは明示しなければならない。なお、著者は間違っ『ジェニー・コンドン嬢宛書簡』と書いているが、正しくは1859年にニューポートでトゥルジェーの生徒であったコンドンが、後年トゥルジェーについての個人的思い出を書き残したものである。

次に著者は「ミュージカル・ヘラルド（1881年7月号）」（著者は本文でも注でも1889年と誤記している）に掲載された岡倉覚三がトゥルジェーに東京女子師範学校での音楽会の様子を報告した書簡を含む「日本の音楽」という記事を全文翻訳して紹介している（p.190 - 2）。記事全文は初めて紹介されたもので、これまでの史料には見られない情報を含んでいるので重要であるが、資料集に含めるべきである。

続く部分（p.192 - 4）は、著者が注197で述べている通り、中村の研究を参考にしながら、音楽取調掛の設置に至るまでの既知の経緯を述べているにすぎない。

その中で、基督教宣教をめぐる、目賀田、伊沢、メーソンはそれぞれの立場で悩んでいた（p.194）、という視点については、すでに拙稿（1992）が、「基督教こそが日本への唱歌導入の最大の障害であった」（p.13）書き、後で著者も取り上げる1880年7月1日付けのメーソン宛伊沢書簡、1878年2月2日付けの目賀田宛メーソン書簡に関連して、伊沢、目賀田、メーソンの心配を指摘し（p.13 - 4）、伊沢が官途につく立場として、唱歌導入に関わることにいかに慎重であったかについては拙稿（1997, p.3）で述べたことを注記する必要がある。

次に、拙稿（1994, p.12 - 3）が紹介したウォーカー（Walker, E. D., 1889）にあるトゥルジェーと目賀田種太郎との会話の部分をほぼそっくり翻訳して載せたことは明示する必要がある（p.194 - 6）。

これに続けて著者は、メーソンが指導した山勢松韻の箏の調弦改良は、日本を文明化あるいは基督教国とするには、伝統楽器の調弦を西洋音楽の調弦に改良すべきだとするトゥルジェーの思想の影響であったと見る（p.196）。

さらに、基督教抜きに近代化は不可能であるとする当時のニューイングランドの人々の典型としてのトゥルジェーの思想を述べている（p.196）。

ー 8)。

次に著者は山住 (1967) が「伊沢とメーソンのくいちがい」とし (p.71), 中村 (1993, p.518, 532 - 3, 1996, p.573) も「伊沢修二とメーソンの齟齬」として取り上げた上記伊沢書簡を取りあげる (p.198 - 200)。

この書簡を唱歌の導入にはキリスト教が障害となったという視点からはじめて取り上げたのが拙稿 (1992, p.13) であり, 唱歌がキリスト教宣教と結びつけられることに伊沢が神経質になった背景に元田永孚を中心とする当時の教育界の儒教化があったという見解は, 拙著 (1993b) の独創的な箇所の一つである (p.160 - 179)。著者がこれを書き換え (p.198 - 205), 注 206 で意味のない参考文献を 2 つあげ, 拙著を参考文献の一つとしてのみ言及しているのはいかなる理由によるものであろうか。頁の指示なしで中村 (1993) を参考文献にあげているが, おそらく「唱歌教育の最高責任者は, 開明派の田中不二麿から河野敏鎌の手に移行した」(p.505) を言っているのであろう。ここと同様, 必要な頁を指示していない注が目立つのは理解に苦しむ。

続いて著者は, 唱歌の歌詞の検閲についての山住の先行研究 (1967 p.84 - 100) を, 開明派と儒教派との抗争という新しい視点から展開した拙著 (1993b p.186, 191, 222, 242) を引用しているのであるから (p.201 - 5), それを明記しなければならない。

他に, 注 213 (p.203) が指示している譜例 29 の楽譜は, 拙稿 (1997) が初めて掲載したもので (p.8), この手稿の複写を私に届けたのは, 著者が注 116 で述べている研究会のあと東京芸術大学付属図書館に調査に出向いた鈴木治である (拙稿, 同上, p.13) ことを知っている著者は, それを明記しなければならない。

その後, 愛国心の育成に唱歌が利用されたことについての中村の意見 (p.205 - 6) と, 唱歌の導入にはキリスト教が障害となったとする私の見解への一つの反論として中村が 1993 年 10 月 21 日に函館の金森ホールで行われたシンポジウムで述べたものを引用している (p.206 - 7)。

残りの部分は基本的には, クリスチャン・ホームの概念についてながながと述べ, 音楽院の女性のための寄宿舎をトゥルジェーはクリスチャン・ホームとして経営し, 幸田延が滞在したのはこのクリスチャン・ホームであり, これによって幸田

は信仰を深めたであろう (p.208 - 214), という著者独自の見方である。

これに関連して, オルガンの大量生産は市場を海外に求めるようになり, キリスト教の海外伝道もこれに関係していたとする赤井 (1995) の研究を引用し (p.211 - 2), 注できちんと参考文献を指示しているのだから, 「赤井氏のご教示による」は全く不要である。

また, 1867 年にトゥルジェーが創設したニューイングランド音楽院は, 1883 年の法人化によって, 14 人の常任理事はいずれも宣教師派遣団体とそれと関係が深い宗教機関の役員で占められ, 全面的にキリスト教海外伝道団体に支援される学校となり, 音楽院の教育目的も音楽を通じてキリスト教海外伝道に貢献する人材の育成におかれ, トゥルジェーもそのことにたびたび言及し, とりわけメーソンの日本での活躍はトゥルジェーの年来の主張を証明する最大のものであった, という私の研究成果の引用で注記を欠いているものは, 拙稿 (1995 及び 1994) と比較すれば簡単に分かることなので, 以下関係する注のみを指示しておく。222, 236, 237, 240 である。

あと指摘が必要なのは, 「トゥルジェーにとってビングの活水女学校への赴任や幸田延の留学は, 『日本はすでに引き離すことのできない絆でわれわれと結びついている』というのを感じさせる出来事であつたろう」(p.214) というのは, 拙稿 (1996) 「1883 年に彼は, 日本との関係について『日本と我々は一つになった』と宣言した。彼がこう宣言した背景には, 東京音楽学校の前身, 音楽取調掛に彼が派遣した L・W・メーソンの業績があったが, その後もこの宣言の通り, 卒業生ビングを日本に派遣し, 幸田延, 美山豊を学校に受け入れるなどして, 彼の晩年と日本との関係はますます深まっていった」(p.1) の引用であり, 幸田延のボストン到着をトゥルジェーが出迎えた箇所 (p.214) は, 中村 (1993, p.544) の引用であることを明記する必要がある。

この節で著者自身が明らかにしたのは, (18) サミュエル (E. I. Samuel, 1913) のトゥルジェー伝の中にも, トゥルジェーがメーソンの日本行きを手配したという記述があると指摘したこと (p.188 - 9), (19) メーソンが指導した山勢松韻の箏の調弦改良は, 日本を文明化あるいはキリスト教国とするには, 伝統楽器の調弦を西洋音楽の調弦に改良すべきだとするトゥルジェーの思想の影響であ

ったと見たこと (p.196), (20)「トゥルジェーはアメリカン・ボードに關係する宣教師になろうとする学生には授業料を免除していた。それに対してアメリカン・ボードのブルーデンシャル・コミッティーはトゥルジェーに感謝状を捧げている」(p.215) ということの他は, (21)「ミュージカルヘラルド7月号」の記事 (anonymous 1881a) を全文紹介し, (22) 音楽院寄宿舎のクリスチャン・ホームの性格を論じたことのみである。

結論

最後に以上指摘した22点の著者の貢献をまとめる。第3章に当てられた論文で学術研究上著者がなした最大の貢献は, (1) トウルジェーを編集長 (Managing editor) としてニューイングランド音楽院が1880年から発行した月刊音楽新聞ミュージカル・ヘラルド (The Musical Herald) を調査し, 越川, 中村, 私の先行研究を補足し, 補完したことに認められる。

(I) メーソンが来日した年の2月号には, 1879年12月13日に, ボストンの女子高等学校で開かれたメーソンの送別会の記事「The Farewell Reception to Prof. Luther Whiting Mason」が掲載され, (II) 4月号には「Children's Department」にさっそく日本にいるメーソンについての記事が掲載された。(III) 6月号にはメーソンの7人の生徒の一人であった三岡丈夫が通訳をしていることなどを報道した「Luther Whiting Mason in Japan」が, (IV) 翌年の7月号には「Music in Japan」が掲載された。この記事に, 当時, 音楽取調掛で通訳をしていた岡倉覚三, 後の天心が5月14日付でトゥルジェーに宛てた書簡が引用されている。(V) 8月号には, 「Professor L.W.Mason and American Music in Japan」という記事が掲載された。この記事では, この年の5月24日に, 皇后の他, 太政大臣三条実美, 文部大輔から司法卿に転じていた田中不二麻呂, 文部卿福岡孝弟, 宮内大輔杉孫七郎らが出席し, 東京女子師範学校で行われた演奏会が, 詳しいプログラムと共に詳細に紹介されている。(VI) 1884年の6月号の「Music and Missions」欄に婦人宣教師コルビーがトゥルジェーに宛てた書簡が掲載された。

著者はII (p.166, 179-86), IV (p.190-2), V (p.208, 243-6) の記事を全文訳すことで, トウルジェーについて「アメリカに居ながらわが国の音楽教育界で果たした役割は, ほとんど語ら

れていないが重要である」(p.452), また, 「メーソンの日本招聘に重要な役割を演じ, メーソンを通じてのちのちまで日本の音楽関係者に密接な協力体制を計った」(p.430) と, 中村 (1993) が発表した説を補完した。

またIIの記事によって, メーソンが箏を西洋の音階に調弦することを山勢松韻に指導したことを指摘し, モースの日記のよく紹介される箇所は, その具体的様子であるとした (p.166-7)。

さらに, 著者はVI (p.163, 175-7) の記事を全文訳すことで, 日本の牧師や宣教師がメーソンの活動を評価していたことを明らかにした越川 (1992) や拙著 (1993), 拙稿 (1995) の先行研究を補足し (p.175-7), 1880年の暮れから翌年にかけてメーソンが行った関西旅行の目的は宣教師と接触することではなかったかという推測 (拙著 1993, p.211, 拙稿 1995, p.108) を裏付け (p.154, 拙稿 1998, p.42), さらにメーソンや宣教師たちは盲人の音楽教育に強い関心を持っていたとする拙稿 (1995) の研究を補足した (p.163)。

その他の貢献をすべて整理すると以下のものである。

(2) ボストンヘラルド紙の記事 (1879) を使って, 「伊沢, 目賀田以外にも5人の日本人がメーソンのクラスにいた」(p.123), 「来日前に, 伊沢修二, 目賀田種太郎とその出会いを通じて日本の音楽を分析していた」(p.123), メーソンの「来日の経緯が伊沢修二の書簡を交えて紹介されている」(p.123) ことを明らかにした拙稿 (1994, p.15-6, 1997, p.1, 4, 8, 10, 13) を補足するものとして, 著者はメーソンが「自ら考案したオルガンデスクをも導入しようとしていた」(p.124), 「蓋を閉めれば事務机に変わるオルガンデスクも考案している」(p.137, 173) こと, それを明治政府が発注した報道されていること (p.173), 5音階に関するメーソンの日本音楽観 (p.143), 日本の唱歌の編集方針 (p.203, 205), メーソンの仕事と日本を楽器の海外市場にすることの関係 (p.211) を指摘した。

(3) 先行研究 (Hartley, K. R. 1966, p.118, Howe, S. W. 1988, p.246) が参考文献として取りあげ, 拙稿 (1994 p.13-4) が原文を紹介したギン社の社史 (Lawler, T. B. 1938) 中, メーソンと日本人との出会いを紹介している箇所を翻訳して紹介し (p.147), また, 先行研究が参考文献としてあげ (Hartley, K. R. 1966, p.121, Howe, S. W. 1988,

p.243, 中村理平 1993, p.405), 拙稿 (1994, p.14) が原文で紹介した, マコナシー論文 (McConathy 1937) をほとんどそっくり訳すことで (p.148-9), メーソンが日本に來た動機を探るときに問題になるメーソンと日本人との最初の出会いについての先行研究を補足した。

(4) 注 114 でフィラデルフィア万国博覧会の日本からの出品に「音楽書一, 音楽に関する二十一卷 (古典及び近世)」があったことを指摘した (p.229-30)。

(5) メーソンの日本での活動を宣教活動への貢献という観点から評価したアメリカ側の資料として拙著 (1993b) が取りあげ, 著者が引用したもの (p.152-3) を補足する資料として「ドワイト音楽ジャーナル 8月号」の記事 (anonymous 1880c) を指摘し, 翻訳して紹介した (p.158-9)。この資料自体への言及はハウ (Howe, S. W. 1988, p.110) にある。

(6) タルカット書簡によってメーソンとカーチス宣教師との交際を裏付けた (p.139)。

(7) ウォーカー (Walker, E. D. 1889) を引用し, メーソンが指導した山勢松韻の箏の調弦改良は, 日本を文明化あるいはキリスト教国とするには, 伝統楽器の調弦を西洋音楽の調弦に改良すべきだとするトゥルジェーの思想の影響であったと見た (p.196)。

(8) 「ドワイト音楽ジャーナル 9月号」 (anonymous 1880d) にあるメーソン書簡中に山勢松韻への言及があることを指摘した (p.165)。

トゥルジェーと音楽院に関しては次の3点が明らかにされた。

(9) 公立学校に音楽の授業を導入する目的の一つは教会の歌唱に役立てることである, というトゥルジェーの思想を紹介した (p.169)。

(10) サミュエル (E. I. Samuel, 1913) のトゥルジェー伝にあるトゥルジェーがメーソンの日本行きを手配したという記述を指摘し, トゥルジェーに会ってメーソンの日本派遣を計画したのが森有礼であるという私の説を補足した (p.188-9)。

(11) ニューイングランド音楽院便覧 (1887) を引用し (p.208-9), 全国から集まってくる女生のための音楽院寄宿舎のクリスチャンホームの性格を論じ (p.209-15), さらに, アメリカンボードの運営委員会議事録 (1886年11月16日) によって「トゥルジェーはアメリカン・ボードに関係する宣教師になろうとする学生には授業料を免

除していた。それに対してアメリカン・ボードのブルーデンシャル・コミッティーはトゥルジェーに感謝状を捧げている」 (p.215) として, 音楽院とキリスト教宣教活動との緊密な結びつきについて論じた拙稿 (1995) の研究を補足した。

オルチンに関して明らかにされたのは次の3点である。

(12) オルチンの第2信は「メーソンの日本音楽論を再確認し, そのことを中心に報告した書簡である」という主張 (p.143-4)。

(13) 文部省お雇い教師メーソンとアメリカンボード日本ミッションとの関係を最初に明らかにした拙稿 (1995, p.115-6) がはじめて取りあげた資料であるオルチン書簡 (1884. 1. 14) を全文翻訳し紹介した (p.160-2)。

(14) オルチンが日本の讃美歌についての論考で『箏曲集』の序文に言及していることを指摘した (p.169)。

以上14点の貢献をまとめるにあたって, 先行研究を大量に引用する必要はまったくなく, 著者は必要な範囲で先行研究あるいは参考文献を簡潔かつ正當に引用すべきであった。

あるいは, 私が指摘した問題箇所について必要な注 (引用文献) を付け加え, 正しい注を書けば, 資料解題として先行研究を紹介した優れた論文に成った可能性があっただけに, フェリス女学院大学附属図書館山手別館室長として研究者の資料照会に丁寧に応じ, 洋楽受容史の研究者の交流と研究の発展を大いに促進した著者に対して, とても残念な思いである。

ただ研究史の混乱を回避するための拙論とあわせて読めば, 第3章は唱歌成立とキリスト教宣教との関係についての研究とその経過にとってかなり重要な情報源になるであろう。故中村理平先生から受けた数々の学恩に思いいたしながら, 実には気が重いこのような論考をなした由縁である。

著者が今後進むべき正しい道は, 業績に性急にせず, 第3章にその萌芽が認められるように, 著者が精通しておられる唱歌とキリスト教宣教との関係についての研究成果を土台にしたオルチン研究であろう。オルチンとボストン宣教本部間の往復書簡を読み進めておられる著者が, 日本の近代音楽史に貢献した新たなオルチン像を構築してみせてくれる日を待望してやまない。

参考文献

- 遠藤宏 (1948)『明治音楽史考』 有朋堂。
- 山住正己 (1967)『唱歌教育成立過程の研究』 東京大学出版会。
- 東京芸術大学附属図書館 (1971)『音楽取調掛時代所蔵目録 (3) 各種資料篇』東京芸術大学附属図書館。
- 野上俊之 (1980)「L. W. メーソンの音楽教育観について」 純心女子短期大学紀要, 第 15 集, 51 - 65 頁。
- 手代木俊一 (1991)「横浜と賛美歌—明治初期賛美歌について」『礼拝と音楽』 第 70 号, 40 - 47 頁。
- 越川美都子 (1992)「明治初期讃美歌研究—七一雑報の記事を中心に—」東京芸術大学, 卒業論文。
- 赤井励 (1992)「明治オルガン史考」『オルガン研究』 (20)。
- 前川公美夫 (1992)『北海道音楽史』。
- 安田寛 (1992)「洋楽移入期における唱歌と讃美歌との関係」『山口芸術短期大学研究紀要』 第 24 巻, 9 - 22 頁。
- 松下鈞 (1993)『洋楽史再考』 国立音楽大学。
- 中村理平 (1993)『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』 刀水書房。
- 安田寛 (1993a)「唱歌導入の起源について」『山口芸術短期大学研究紀要』 第 25 巻, 13 - 24 頁。
- 安田寛 (1993b)『唱歌と十字架 明治音楽事始め』音楽之友社。
- 赤井励 (1994)「明治期の米国製リードオルガン」『礼拝と音楽』 第 82 号, 10 - 14 頁。
- 安田寛 (1994)「唱歌導入史に関する資料紹介」『山口芸術短期大学研究紀要』 第 26 巻, 9 - 18 頁。
- 赤井励 (1995)『オルガンの文化史』 青弓社。
- 安田寛 (1995)「L・W・メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』 第 44 巻, 105 - 127 頁。
- 中村理平 (1996)『キリスト教と日本の洋楽』大空社。
- 安田寛 (1996)「晩年のトゥルジェーと日本の洋楽」『山口芸術短期大学研究紀要』 第 28 巻, 1 - 5 頁。
- 安田寛 (1997)「唱歌の起源—目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元—」『山口芸術短期大学紀要』 第 29 巻, 1 - 14 頁。
- 安田寛 (1998)「京都と神戸ステーションの音楽教育史—アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史その二—」『キリスト教社会問題研究』 第 47 号, 30 - 80 頁。
- 若山晴子 (1999)「ジョージ・オルチン師と讃美歌」(神戸女学院大学『新撰讃美歌』研究会編『新撰讃美歌』研究』 新教出版社, 111 - 155 頁。
- 秋岡陽 (2000)「手代木俊一著『讃美歌・聖歌と日本の近代』」『キリスト教史学』 第 54 集, 116 - 118 頁。
- 日本英学史学会 (2000)「日本英学史学会報」No. 91, 5月1日。
- anonymous (1879). Music in Japan. The Boston Herald, Supplement. Boston, 8 November.
- anonymous (1880a). Music Teaching in Japan. Music Courier. Vol. 1, No. 20, New York, 18 June, 281.
- anonymous (1880b). Children's Department. Musical Herald. April, 91 - 92.
- anonymous (1880c). Music in Japan. Dwight's journal of Music. Boston, 14 August, 135.
- anonymous (1880d). Mr. Mason in Japan. Dwight's journal of Music. Boston, 11 September, 151.
- anonymous (1881a). Music in Japan. Musical Herald. July, 164.
- anonymous (1881b). Professor L.W.Mason and American Music in Japan. Musical Herald. August, 186.
- G. Allchin (1884). letter to N. G. Clark, 1884. 1. 14 (Roll 9, 61).
- Colby, A. M. (1884). Music and Mission. Musical Herald. 5: 384.
- anonymous (1887). Manual of New England Conservatory of Music, 1886 - 87.
- Walker, E. D. (1889). "The New England Conservatory of Music." Cosmopolitan VII(May): 488 - 99.
- Congdon, J. (1907). [Eben Tourjee].
- Coburn, F. W. (1934). Eben Tourjee. Lowell Courier - Citizen.
- Samuel, E. I. (1913). "An Amazing Career...Life of Eben Tourjee." New England Conservatory Review iii/2: 12 - 17.
- McConathy, O. (1937). "Mason Song" in Japan. Musical Educators Journal. 24: 20 - 22.
- Lawler, T. B. (1938). Seventy Years of Textbook Publishing, A History of Ginn and Company. Boston, Ginn and Company.
- Tourjee, L. E. (c1960?). For God and Music, The Life Story of Eben Tourjee, Father of the American Conservatory. Los Angeles, unpublished typescript.
- Hartley, K. R. (1966). A Study of the Life and Work of Luther Whiting Mason. The Florida State University. 54.
- Howe, S. W. (1988). Luther Whiting Mason: contributions to music education in nineteenth-century America and Japan. University of Minnesota.